

南伊豆における調査風景

目次 CONTENTS

文献からアジサイを考える 白石 哲士	(1)
「長崎の花 あじさい」創刊号からシーボルトを見る 平澤 哲	(9)
アジサイの自生地の野生動物による被害 杉本 誉晃	(12)
シーボルト ー日本植物誌の図版をみるとー 平澤 哲	(13)
ベニガク系アジサイ 平澤 哲	(16)
北茨城 あじさいの森 杉本 誉晃	(19)
日本のアジサイがヨーロッパに渡った経緯 平澤 哲	(22)
2023 日本自生アジサイ展（鎌倉アジサイ同好会主催）を見学して 平澤 哲	(25)
アジサイ発生の起源 杉本 誉晃	(27)
神奈川県におけるガクとヤマアジサイの交雑種及びその周辺のアジサイ 平澤 哲	(28)
ミニ情報	
オタクサが発見された場所は？ 平澤 哲	(11)
西日本型のヤマアジサイについて 平澤 哲	(29)
<hr/>	
あじさい交流広場 交流・親睦と情報交換の場としてご利用ください。	(30)
あじさいのフォトギャラリー メールでも良いので写真をお送りください。	(31)
2023 年度 総会議事録要旨 (33) / お知らせ (裏表紙)	

文献からアジサイを考える（1）

合計47ページの長文ですので、5回に分けて掲載いたします。

白石 哲士

はじめに

アジサイにつきましてインターネットで公開されています文献を調べています。主に国立国会図書館、Biodiversity Heritage Library、中国哲學書電子化計劃等を利用しました。どの書物にアジサイの記載が有るのか不明でしたので多くの電子化された文献を読みました。最初は情報収集で終わる予定でした。参照文献のほとんどは単にあぢさい 味狭藍 紫陽花等の記述がほとんどです。しかしこれらも数が集まってくると気が付く事が有ります。あぢさゐの語源や別名につきましてはいろいろな説が有り、定説が有るもの無いものが有ります。今回無謀にもこれらの問題に多少挑戦してみました。これらの謎解きも私の妄想の産物で何を考えているかとお叱りのお言葉を言われる方々も多くいらっしゃると思います。しかし、別の考えも有っても良いかなと思っています。大半の記事につきましては興味が無い方には退屈な内容で大変申し訳ありません。参照文献の多くは省略しても良かったのですが今後このような機会は少ないと思ひ、多く掲載しました。今回参照の文献等はネットで閲覧可能です。アジサイに対する従来からの説等は、長年支持されてきましたので、それは貴重な意見だと思います。ただ私は過去のあぢさいの記述がなぜそうなっているのか、実際の文献をインターネット等で調べ、考察しただけです。あくまで個人の意見です。今回掲載したものやその他は <https://sites.google.com/view/hydrangeaceae> でも閲覧できます。

紫陽花は、あぢさゐではなく別の植物だった

あぢさゐは、「万葉集」に味狭藍、安治佐為が記載されたのが最初です。その後、源順が「和名類聚抄」紫陽花 阿豆佐為、「新撰字鏡」昌住：菡 止毛久佐 又 安知左井、「言塵集」今川了俊：またふり草 あぢさい かた志ろ草 四平草等がアジサイの名称として記載され、その後もこれらの名称は引用されています。

江戸時代に紫陽花の名称はアジサイとは関係のない別の植物とする記述が現れ、牧野富太郎博士は著書でアジサイは日本生まれの植物で中国の植物ではない、アジサイに対して紫陽花を使うのは間違っていると書かれています。山本武臣氏は何回か日本アジサイ協会会報でも同様の事を書かれています。

中国科学院植物研究所の植物智では中国語版の「中国植物志」が現在も公開されています。「中国植物志」第35(1)巻(1995) *Hydrangea macrophylla* var. *macrophylla* 産地：中国各地、日本、朝鮮と有ります。

英語版の「Flora of China」では、*Hydrangea macrophylla* var. *macrophylla* は日本原種なので記載されていません。

植物智では植物標本も閲覧可能で、古い標本では *Hydrangea macrophylla* 1921年江蘇省 テマリ咲きのガクアジサイ、*Hydrangea macrophylla* 1926年中国 浙江省 一重のガクアジサイ、*Hydrangea macrophylla* 1928年 貴州省 テマリ咲きのガクアジサイ等の標本も閲覧可能です。

「中国植物志」*Viburnum macrocephalum* (ムーシューチュー)：綉球莢蒾(新擬) 綉球(廣群芳譜)、木綉球(拉漢種子植物名称)、八仙花、紫陽花(南京)と書いて有ります。紫陽花は紫陽花です。テマリ咲きのこのガマズミの仲間に対して紫陽花が使われていて、中国では *Viburnum macrocephalum* 紫陽花でネット紹介している方々がいます。

紫陽花

・「白氏文集」：紫陽花 招賢寺有山花一樹無人知名色紫氣香芳麗可愛頗類仙物因以紫陽花名之 何年植向仙壇上早晚移栽到梵家雖在人間人不識與君名作紫陽花

招賢寺の山に一本の花木が有るが名を知る人がいない、色は紫色で良い香りがして美しく好ましいのでこの名前を紫陽花とす。幾年仙壇（仙人の住む場所）に植わっていたのか、その内梵家（お寺）に移植されたが土地の人と雖も知らないの、君に紫陽花という名を作って与えましょう。

源順が「和名類聚抄」の中で、この「白氏文集」紫陽花に対し紫陽花 和名 阿豆佐爲 としたために、紫陽花はあぢさみの別名として認識されました。紫陽花の実物や絵等が無い状態で源順が断定したのはそもそも無理があります。

中国では「南部新書」で、紫陽花は紫の桂であるとしました。

江戸時代に入り中国の文献の研究が進み、小原桃洞は「桃洞遺筆」 [2]の中で「白氏文集」、「南部新書」、「彙苑詳註」、「淵鑑類函」、「平泉山居草木記」の文章を引用して、小野蘭山等の主張と同様に紫陽花は紫花の木犀としました。（「大和本草会識」：今アヂサイト伝アヂサイハ紫陽花ニ充ルハ悪シ 紫陽花ハ木犀ノ紫花ナルモノ又白花モアリ白アヂサイト伝アヂサイハ漢名八仙花白樂天伝紫陽ト伝モ木犀ノ紫花ヲ伝ナリ。他に「蘭山草花真形図」、「秘伝花鏡紀聞」等）

木犀は「本草図譜」では木犀 もくせい きんもくせい、銀桂 ぎんもくせいと書いて有ります。

・「杭州府志」 二十一：紫陽花 招賢寺有山花一樹無人知名色紫氣香芳麗可愛頗類仙物因以紫陽花名之長慶集 白居易紫陽花詩 何年植向仙壇上早晚移栽到梵家雖在人間人不識與君名作紫陽花

・「白氏長慶集」 卷二十：紫陽花 招賢寺有山花一樹無人知名色紫氣香芳麗可愛頗類仙物因以紫陽花名之何年植向仙壇上早晚移栽到梵家雖在人間人不識與君名作紫陽花

・「西湖遊覽志」 白樂天紫陽花詩序云招賢寺有山花一樹色紫氣香芳麗可愛頗類僊物而人無識者因以紫陽花名之詩云何年植向僊壇上早晚移栽到梵家雖在人間人不識與君名作紫陽花

・「錢塘縣志」 紫陽花 招賢寺白居易紫陽花詩序曰招賢寺有山花一樹色紫氣香芳麗可愛頗類仙物而人無識者因以紫陽花名之云何年植向仙壇上早晚移栽到梵家雖在人間人不識與君名作紫陽花

・「西湖志」 招賢寺紫陽花 「南部新書」 招賢寺僧植桂香紫可愛郡守白公號紫陽花（白居易紫陽花詩并序） 招賢寺有山花一樹色紫氣香芳麗可愛頗類仙物而人無識者因以紫陽花名之云何年植向仙壇上早晚移栽到梵家雖在人間人不識與君名作紫陽花

・「西湖志纂」 有山花一樹色紫極香人不識名白樂天名為紫陽花（白居易招賢寺題紫陽花詩） 何年植向仙壇上早晚移栽到梵家雖在世間人不識與君名作紫陽花

・「廣群芳譜」 御定佩文齋廣群芳譜卷三十九：「南部新書」 杭州靈隱山多桂寺僧日月中種也至今中秋夜往子墜寺僧亦曾拾得招賢寺僧植桂香紫可愛郡守白公號紫陽花 「東坡詩注」 天竺昔有梵僧云此山自天竺鷲山飛來八月十五夜嘗有桂子落

杭州靈隱山に桂（木犀）が多く生えていて、寺の僧曰く「月中種なり」、今は中秋の夜でしばしば子（桂子：桂の実）が落ちるので寺の僧がそれを得る、招賢寺の僧が植えた桂は香り、紫色で可愛く郡守白公（白樂天）は紫陽花と名付けた。

「南部新書」では杭州靈隱山多桂寺僧日月中種也至今中秋夜往往子墜寺僧亦曾拾得招賢寺僧植桂香紫のエピソードを付け足してあります。

「廣群芳譜」御定佩文齋廣群芳譜「南部新書」と「南部新書」とでは少し文章が違っていますので注意してください。

「南部新書」 杭州靈隱山多桂寺僧云此月中種也至今中秋望夜往往子墜寺僧亦嘗拾得而岩頂崖根復産奇花氣香而色紫芳麗可愛人無知其名者招賢寺僧取而植之郡守白樂天尤愛賞因名曰紫陽花

（「杭州府志」桂子 杭州靈隱山中秋夜往往桂子墜寺僧會拾得 「南部新書」 月桂子太子狸豆破之辛香古

老相傳是月中下也餘杭靈隱寺種得一株近詩人所謂述「洞冥記」云有還飛雞朝往夕還常御桂實歸于南土南土月路也故北方無)

杭州にたくさん生えています桂とその伝説、招賢寺の在る靈隱山、中秋の桂の逸話や紫桂の記述が他の文献にある為に、これらが紫陽花 桂 紫色の木犀の根拠となったと推測します。ただ紫桂は紫陽花同様に何を指すのかは不明で疑念が残り、両者共に架空の植物かもしれません。

・「韻語陽秋」卷十六：唐招賢寺有山花色紫氣香穠麗可愛以託根招提偶赦於樵斧固為幸矣而人莫有知其名者白樂天一日過之而標其名曰紫陽於是天下識所謂紫陽花者其珍如是也豈不為尤幸乎樂天之詩曰 何年植向仙壇上早晚移栽到梵家雖在人間人不識與君名作紫陽花

・「格致鏡原」卷七十二：杭州靈隱山桂花紫色清香可愛白樂天號之為紫陽花南郡新書云月中種也(「南郡新書」と原文はなっていますが、「南部新書」の間違いだと思います)

・「彙苑詳註」：紫陽花 杭州靈隱山桂花紫色清香可愛白樂天號之為紫陽花 南部新書云月中種也

・「淵鑑類函」：紫陽花 南部新書 招賢寺僧植桂香紫可愛郡守白公號紫陽花

・「和名鈔塞問」の記述の中に「案仁湖集」を引用した記述があります。そこには木樨は紫陽だと書いてあります。「案仁湖集」を調べましたがどの様な文献か分かりませんでした。

か

萩原義雄先生のアジサイに関するネット記事：あじさい 紫陽花 あぢさじみがネットで公開されていて大変参考になりました。

紫桂

・「平泉山居草木記」有剡溪之紅桂鐘山之月桂曲阿之山桂永嘉之紫桂剡中之真紅桂

・「羅隱」岩畔早涼生紫桂

・「拾遺記」岱輿山北有玉梁十丈駕玄流之上傍有丹桂紫桂白桂皆直上百尋可為舟航謂之文桂之舟

・「酉陽雜俎」卷一 天咫に舊言月中有桂有蟾蜍故異書言月桂高五百丈下有一人常斫之樹創隨合人姓吳名剛西河人學仙有過謫令伐樹釋氏書言須彌山南面有閻扶樹月過樹影入月中或言月中蟾桂地影也空處水影也此語差近とあり、桂男の伝説です。月中有桂樹(「彙苑詳註」とあり、月と桂の伝承は古くからあります。桂は時代により桂に当てはまる植物の種類が違いますので注意が必要です。

「中国植物志」では木犀 Osmanthus fragrans 木犀 桂花(通称)とあり、ギンモクセイです。金桂、銀桂はありますが紫桂の記述は有りません。「康熙字典」では椶、「説文解字」桂也、「廣韻」桂木花白也、「爾雅」椶,木桂とあります。銀桂はギンモクセイ、金桂はキンモクセイだと思います。「襟嶺花鳥画譜 木犀花・[ミミズク]」に木犀の絵が有ります。

中国で紫陽花は桂 木犀 紫色の桂とし、江戸時代にもこれを追認したのですが、江戸時代の多くの文献は依然として「和名類聚抄」の紫陽花の記述を使用し、これが今日まで続いています。Syringa oblata 紫丁香(Syringa vulgaris ライラックは日本ではムラサキハシドイ紫丁香花で表記されていますが「中国植物志」では欧丁香、洋丁香です)ですと香り色から紫桂の候補になりそうですが木樨の仲間では有りませんし紫丁香が紫桂との記述も有りませんので保留といった所でしょうか。

日本でのアジサイ 紫陽花問題は、当然中国には有りません。紫陽花を紫桂としたからです。古代中国で、ガマズミの仲間は鑑賞の対象になったのに対し、後世に日本よりテマリ咲のガクアジサイ：あぢさいが中国にもたらされてから注目されたと思われます。それとは別に中国自生のアジサイ原種の仲間は薬草としての認識だけだったのか、鑑賞の対象になっていたのか等は資料不足で不明です。日本、中国共々あまり人気の無い植物だったのかもしれませんが。古代中国では中国自生のアジサイの仲間の名称は何だったのでしょうか。

アジサイ各種の表記

掲載の名称につきましては不適切、間違った例も有りますが、書籍に記載されたまま掲載してあります。尚、濁点を省略して書いてある書籍も多くありますが、参考文献の表記のまま掲載してあります。資料の大半は国立国会図書館デジタルコレクションや大学等でネット公開されています書籍を主に参照しています。残念ながら非公開の書籍はネットで閲覧は出来ませんので、今回はそれらの一部分を掲載しています。古い文献は崩し文字で書かれていますので、今回掲載した中に誤りが有るかもしれません。参照される場合は原文を読まれる事を推奨いたします。

アジサイ

- ・「万葉集」味狭藍、安治佐為
 - ・「和名類聚抄」紫陽花 阿豆佐為
 - ・「新撰字鏡」昌住：菴 止毛久佐 又 安知左井
 - ・「言塵集」今川了俊：またふり草 あちさい かた志ろ草 （宮内庁書陵部：国書データベース参照：）
- 「言塵集」またふり草とはあちさい乃一名也和名云名四平草（奈良女子大学が公開しています「言塵集」か「古名録」等に記述が有ります。宮内庁書陵部の「言塵集」では記述が抜けた部分有ります）
- ・「五月雨日記」東山殿御香合 あちさひ
 - ・「古今和歌六帖」あぢさゐ よひら
 - ・「連歌至宝抄：紹巴」あぢさゐ 四ひらの花
 - ・「百品考」瑪哩花 天麻裏 アジサイ
 - ・「花纂」繡毬 ガク 紫陽花 アヂサイ 御馬鞭 スズカケ
 - ・「駒場御薬園植物目録」アシサイ 紫陽花 御常花 スズカケ コテマリと有ります。「花纂」に紫陽花 アジサイ 御馬鞭 スズカケとあり、「駒場御薬園植物目録」は御馬鞭 スズカケを紫陽花の記述の延長と間違えた様です。「アジサイの話」山本武臣でも引用されています。「梅園草木花譜春之部 1」に粉團花 コテマリ 御常花 鈴掛 麻葉繡毬とあります。「剪花翁伝」も小手毬花 こてまり 麻葉繡毬 鈴懸 ずかけとしています。御馬鞭（「秘伝花鏡」笑靨花笑靨一名御馬鞭 ）は「本草要正」笑靨花コゴメバナとあり、ユキヤナギです。
 - ・「花壇叢草木画譜」紫陽 あぢさい
 - ・「花壇綱目」あぢさへ
 - ・「花暦百詠」天麻裏掛 繡毬 アシサヒ 天麻裡掛（「花暦百詠」天麻裏掛 花與粉團無異初開綠色既而大放有白如脂碧如黛艷如黃華者有濃如燕頰淡如青蓮者有兩色平分如合璧五色相間繡毬者一樹中光恠陸離迴羣芳一洵閩南琪樹海外瑤葩也近武彝諸名峰亦常見之）
 - ・「訓蒙図説」紫陽 しやう あぢさゐ 紫陽花 しやうか 繡毬花
 - ・「尺素往來」防葵花 アスサキ 味佐井
 - ・「古名録」安治佐為 あぢさ井 八仙花 アヂサキ 安豆佐為 狭藍 安川佐伊（八仙花）等（「古名録」にアジサイの別名として阿川佐伊「本草類編」と有ります。「本草類編」では梓白皮 阿川佐、「和名本草」梓白皮阿川佐伊、「和名海」阿都佐乃岐 梓白皮と有り、梓白皮 キササゲの記述を誤認した様です。「続羣書類従 第31輯 上（雑部）」梓白皮 和名阿川佐乃岐しかし、阿川佐が梓でかつあづさの読み方とすると単にあづさいに対して当て字で安川佐伊あづさいとした可能性は有ります。）
 - ・「異名分類抄」四ひらの花 またふり草 かた志ろ草 ともくさ 菴 止毛久佐 又 安知左井
 - ・「四季賞花集」紫繡玖 あづさい
 - ・「字鏡集」菴 ヘン アツサへ

- ・「紀伊国産物雜記」八仙花
- ・「絵本時津艸」紫陽花
- ・「菜譜花譜拔萃」紫陽花 アシサイ 花開く時白し後に青し、また七変化にて色度々変わる
- ・「括本草」アヂサイ アヅサイ ヤブテマリ カイバ 紫陽花 聚八仙（ここではヤブテマリ カイバの記述に問題があります）
- ・「草木図説後編」アヂサイ 瑪哩花 七ヘンゲ
- ・「大和本草弁正」紫陽花 アジサイ 八仙花 聚八仙（カイバ又ヤマデマリを聚八仙とするは非じ、聚八仙はアヂサイ、カイバは漢名胡蝶樹という）
- ・「天然薬草採集仕上及販売法」七陽花 あぢさゐ
- ・「三十六花撰」東都浅草花やしき： 紫陽花
- ・「俳諧季寄図考 2 卷 [1]」紫陽花 アヂサ井 聚八仙 紫繡毬 線繡毬 四葩花
- ・「梅園草木花譜夏之部」紫陽花 アジサイ 四葩花
- ・「謀嶺花鳥画譜 紫陽花 軍啓鷄」紫陽花 あぢさゐ 阿豆佐為 安知佐為 加久波奈 七篇化 署篇花
- ・「物品識目」アヂサイ 聚八仙
- ・「庶物類纂」瑪哩芥 天馬祖兒 壽錦 憂狐煞蕪カクサウ 拿拿歇母容ナナヘムケ
- ・「俳諧多識編 2 卷 [1]」天馬外卦
- ・「山幸 2 卷中」紫陽花 よひらの花 紫陽草
- ・「七十二候名花畫帖」瑪哩繡毬
- ・「漳州府志」瑪哩芥
- ・「俳諧漫画」紫陽花 阿ぢさい
- ・「月令博物筌 16 卷 [6]」紫陽花 あぢさい 四ひらの花 よひらの花
- ・「古今俳諧明題集 5 卷 [2]」紫陽花 アヅサ井 安ぢさゐ 阿ぢさゐ
- ・「草木弁疑 4 卷」：山丹 紅繡毬倭国中来（「學圃雜疏」）四季山丹 山丹（「酉陽雜俎 続集」） 雪毬 碧繡毬 麻葉繡毬 盃七煞噓アヂサイ 八仙花 : 山丹には 2 種類あり一つは虚寛有露ヒメユリで、もう一つの山丹が アヂサイだとしています。但し「大和本草紀聞」ではこの山丹 紅繡毬はアジサイではなく、琉球の山丹花であるとしています。雪毬、「梅園草木花譜春之部」麻葉繡毬 コテマリとあり別種です、「俳諧季寄図考 2 卷 [1]」繡毬花の所で粉團 雪毬等と書いて有りガマズミとして扱っています。
- ・「袖珍農芸辞典」あぢさゐ 紫陽花 紫繡毬 聚八仙 七變化（ななばけ）
- ・「泰西本草名疏」VIBURNUM TOMENTOSUM. TH アヂサ井
- ・「和漢三才図会」紫陽花 あぢさゐ 安豆佐為 安知佐為 加久波奈 署扁花 ガクハナ
- ・「剪花翁傳」紫陽花 あぢさい あぢさい 説明文で紫陽花 三種 色紅白藍と有ります。この頃にテマリ咲のアジサイが 3 種類有ったという事です。
- ・「古来風躰抄」あぢさゐ
- ・「艸花銘志 7 卷 [6]」紫陽花 アシサイ一種 額草
- ・「大窪本草動物篇」ヲホアヂサイ
- ・「小野水谷問答動植略図」大アジサイ（テマリ花です） ヲホアヂサイと大アジサイはあぢさゐと同じか異なるかは議論の余地があります。
- ・「水谷助六先生紀聞」一名八仙花 和名七ヘンゲ・・・万葉集にアヂサイと伝、和名抄にアヅサイと伝。「日本植物誌」シーボルトに 55. HYDRANGEA BELZONII 和名 Oho-azisai とあり、メインの図版はガクアジサイでその左下にテマリ咲のガクアジサイの図が有ります。この和名 Oho-azisai はあぢさゐに対して「水谷助六先生紀聞」等で用いられたので、この和名 Oho-azisai は問題があります。「シーボルト先生其生涯及び功績」の中にオホアジサイ HYDRANGEA BELZONII の乾葉多数ありしことは「日本植物誌」に載

せたり、オホアジサイ 紅萼 HYDRANGEA BELZONII の條下 水谷が此植物の乾曝せるを多數シーボルト先生に贈與したりとあります。またシーボルトが江戸参府のおり5月24日府中から藤枝の間にアジサイなど多しと書かれています。

ではなぜ従来のあぢさゐ、紫陽花に対してヲホアヂサイ、大アジサイと表記したかです。これは推論ですがテマリ咲のアジサイが江戸時代には複数存在し従来の花の大きいタイプと花が小さいタイプが存在したのでこれを区別する必要があり従来のタイプをヲホアヂサイ、大アジサイとし小型タイプが後のオタクサとなったか、従来のあぢさゐよりも大型のタイプが存在したかです。「日本類語大辞典」志田義秀、佐伯常麿 共編 あぶみあぢさゐ鑑紫陽花：普通のあぢさゐより花が小さいの記述があります。

- ・「伊豆国産物帳」阿じさい ちこくかんは
- ・「樹木和名考」アヂサキ アツサイ ちこくかんば 紫陽花
- ・「畫本野山草」紫陽（唐あぢさいの箇所で使用されています） あぢさい、紫陽花
- ・「Amenitates Exoticae」陽紫（右横書きなので実際の読み方は紫陽）、Siyo、Adsai、Ansai、Adsikii
- ・「新撰類聚往来」味の次の一字が特殊で分かりません。アチサイ
- ・「本草和解」（薬学雑誌/48 卷（1928）9 号：常山考 木村 康一）：阿地左伊
- ・「増補 俳諧歳時記菜草」紫陽花 あぢさゐ 四葩花 四葩の花
- ・「和漢音釈書言字考節用集」紫陽花 アヂサキ アツサイ 線繡花
- ・「蘭例節用集」繡毬花 あぢさい てまりばな
- ・「雅俗幼學新書」2 卷 紫陽花 アヂサキ
- ・「文藻行潦」7 卷 粉團花 漳州府志 アヂサイとあり、粉團花とアジサイを混同しています。
- ・「地錦抄」がく
- ・「花壇叢草木画譜」がく
- ・「珍袖鑑」ガク 胡蝶 コテウ 紅聚八仙 ベニテマリ 山丹花
- ・「五十七卉考」玉蝴蝶 額草
- ・「剪花翁傳」楽艸 がくさう がく艸
- ・「錦窠植物図説」：（名古屋大学附属図書館電子コレクション参照）島名 アツサイシバ、また別の画像では葉に覆輪のあるタイプの記述も有ります。



「小野水谷問答動植略図」



「花壇叢草木画譜」



「山幸 2 巻 中」



「霜葉譜」

ベニガク

・「草花説」額サウの図は両性花が青みを帯び、中性花は白につま紅 タイプです。葉はヤマアジサイタイプでいわゆる関東のヤマアジサイ白花から生じたタイプでは無い様な気がします。しかしベニガクタイプです。

- ・「草木図説後編」ベニガク
- ・「梅園草木花譜夏之部」紅額草 紅
- ・「本草写生目録」蛺蝶花（廣東新書）ベニガク
- ・「草木弁疑」歌你曼孤へニカク
- ・「樹木和名考」ベニガク ベニガクソウ 七変化 紅額草
- ・「物品識名」蛺蝶蒼 ベニガク



「樹木図解」



「草木図説後編」

(2 枚の写真は国立国会図書館デジタルコレクション資料を加工してあります)

ヤマアジサイ

・「本草図譜」ヤマチャ（江戸時代ヤマチャは椿のことですが、このケースでは、甘茶に対して甘くないタイプを、山に生えているアマチャの一種なのでヤマチャにしたと推測できます）コガクサウ コガク飛鳥額

・「山本望洋採薬記目録」コガク

「大和本草」小額草

・「百品考」玉蝴蝶 コガク ヤマアヂサ井（江戸時代のヤマアジサイはコアジサイの事ですが、ここではコアジサイではなく例外的にヤマアジサイの意味で使っています）

・「紀伊国産物雑記」小額草

・「本草図譜」コガク ヤマアマチャ

・「木曾採薬記」土常山の一種 方言ヤマチャ

・「経峯并布引山採薬卉木記」コガク 白花ノコガク

・「遠山氏採収〔サク〕葉目録ミヤマアジサイ コガク也（「梅園草木花譜夏之部」に深山紫陽花 ミヤマアジサ井の絵が有ります。装飾花が無くコアジサイの様にも見えますし、装飾花が無いヤマアジサイにも見えます）

・「神農本経解故 10 卷. [3]」索話阿日殺衣サワアジサイ

（次号に続く）

アジサイは個性があり、たくさんの変異を持っています（交雑種、伊豆）

花色が変化

一つの株で三種の花房



↓

+



↓

+



「長崎の花 あじさい」創刊号からシーボルトをみる

編集 平澤 哲

「長崎の花 あじさい」創刊号（長崎あじさい会、昭和53年3月1日発行）から、シーボルトの名が含まれた文章を紹介します。

発刊によせて 諸谷義武

初夏に鳴滝の国指定史跡、シーボルト宅跡を訪ねると一面にこぼれるように咲く、あじさいの花の優雅な赤や青紫色に見も心も染まるようです。

このあじさいは、シーボルトが愛人のお瀧さんの名を附してハイドランゼア・オタクサという学名で紹介して以来、広く知られるようになりましたが、地元長崎では古くからシーボルトゆかりの花として、また、「お瀧さん花」として市民に馴染み深い花であります。

私が市長に就任後、間もない昭和四十三年、文化のまち長崎に市花がないことを残念に思い、市民の皆様に広く公募いたしましたところ、あじさいが最も多く、同年三月全国で三番目の指定の市花に制定いたしました。

あれから十年目を迎えた今日、あじさいは風頭山のあじさい園やグラバー園、中島川遊歩道などの街並みのいたるところから、家々の庭先にまでその美しい花を咲かせ、市民皆様に親しまれております。あじさいの花ことば「忍耐強い愛情」は私の好きな言葉の一つであります。

この間、昭和四十八年十月には愛好者の方々が相集い長崎あじさい会を発足されましたが、この度、その機関紙「あじさい」が市花制定十周年の記念として発刊のはこびとなりますことは、本市にとりましても意義深くご同慶にたえません。

岡野喜一会長先生はじめ、ご関係者の方々のご努力に深く敬意を表しますと共に機関紙「あじさい」を通じて長崎の花あじさいがさらに多くの人々に愛され、花いっぱい美しい街づくりへとつながりますことを心から念願して止まない次第であります。（名誉会長 長崎市長）

長崎とあじさい 岡田嘉一

「あじさい」が長崎の市花に制定されたのは昭和四十三年、本会の名誉会長、諸谷義武市長に依って剪定されたことに始まるが、その由来はこの花が昔から長崎市民との馴染みが深く又、文政六年（1822）に長崎出島のオランダ商館付きの医師として来日し、前後九年間滞在したドイツ人シーボルトがわが国で採集、研究した結果を彼の大著、日本植物誌（Flora Japonica）に精緻の図とラテン語の記載文及びフランス語の解説を附して発表した中にこのアジサイが掲載されている縁故と彼が特にこの花を愛好したことに基づくものと思われる。

シーボルトはこの著書の中で、アジサイ属（Hydrangea）として十四種類を記載しているが、特に名高いのは我々が現在、アジサイの名で呼んでいる一名テマリバナに *Hydrangea Otaksa* の学名を附し、和名もオタクサとしたことである。即ち、彼はこの花の和名をアジサイとつけずにオタクサとし、今、我々がガクアジサイと呼んでいる種類（*Hydrangea macrophylla*）の方にアジサイの和名をつけている。

シーボルトがこの著書で記載したアジサイ類は彼自身が長崎附近や江戸参府の途次、採集したものの外、弟子達から贈与されたものに基くと思われるが、中に今日でも珍しいシ チダンカ（*Hydrangea stellata*）の様な種類を当時、発見し記載したことは並々ならぬ努力と研究の賜であると思う。

アジサイ類は元来、わが国ではすでに一千年以上の昔から知られていて、萬葉集（第四卷七七三、第二十卷四四四八）にも味狭藍、安治佐為の字を当てて歌に詠まれているが、当時この「あじさい」と呼んでいた種類は今日のどの種類であるかは明らかでないが、恐らく今のアジサイではないと考えられる。

今日のアジサイはガクアジサイを母種とした園芸品種であろうとするのが学会の通説となっているが、この作出が何時、何処で行われたかとなると未詳である。シーボルトはこのアジサイ（彼のいうオタクサ）は中国で栽培されている *Hydrangea Hortensia* なる種類に酷似して居り、それが数世紀前に日本へ移入されて変化したものであろうと書いているが、これ等に就てはいづれ稿を改めて論究してみたい。（会長）

シーボルトのオタクサ 岡田嘉一

文政六年（一八二三）六月、獨逸人シーボルト（Ph. Franz von Siebold）は和蘭の商館医として来日し、長崎に滞在して医療任務のかたわら動植物の採集、研究を行って六ヶ年在住の後、文政十二年十二月八日、帰国し、滞日中の資料を纏めて植物は日本植物誌（*Flora Japonica*）として発表した。その中にアジサイ属として十四種類を図示解説をしてあるが、それに現在のアジサイ（長崎方言、お滝さん花）をオタクサの和名で記載し、アジサイの和名は現在のガクアジサイにつけている。

彼がこのオタクサの名称を学名及び標準和名に附した由来に就ては嘗て呉秀三博士によって、シーボルトの長崎での愛人、楠本タキに基くと推理されたが、これが現在、広く是認されて居る。

所で、このオタクサなるアジサイを彼が長崎の何處で入手したか、換言すればこの *Hydrangea Otaksa* の原木はどこにあったかを推論してみると、彼の著書には、この種類は中国産の *Hydrangea Hortensia* に近似する新種であり、昔、日本へ中国から輸入されたものであろうと推理し、植物誌に記載した資料は長崎の中国派の Sinsiu の仏僧の庭から入手した旨を書いて居るが、この Sinsju は何と意味するのか？これを一般には眞宗と解されるが、これには不合理の点がある様に考える。

即ち、シーボルトの滞日当時は現在の眞宗（浄土眞宗）と呼ばれている宗派は主として、一向宗（門徒宗）とよばれ、眞宗（浄土眞宗）の名称が正式に認定されたのは明治五年（一八七二）三月であるから、当時は眞宗を名乗っていた寺は無かったことになる。その上、シーボルトが中国派の寺として居る点から考えると眞宗は中国系とは云えない観点からすれば黄檗宗の寺がまづ考えられる、

当時、長崎市内にはこの宗派の寺は興福寺・福濟寺・崇福寺・聖福寺の四ヶ寺があつて、この中からシーボルトがオタクサを得た寺を選出することになるが、その参考となる文献がなく、ただ僅かに左記の二説を参酌して一応、論及することにした。

即ち、長崎の郷土史家であり、特に幕末の医学者及び生物学者の事蹟に精（くわ）しい長崎大学出身の医師、中西啓氏の話に據（よ）れば中西氏の大祖父（鍋島藩の藩医）から父君に伝聞された話として「シーボルトは福濟寺からアジサイを持って行かれた」という話を聞いて居られるのと、もう一つの論拠は嘗て長崎新聞に居られた大庭耀氏の「長崎隨筆」の記事に、このアジサイのあつた寺は福濟寺であるとして居るが、その出典に就いては明らかでない。

この両説とも福濟寺の点で一致して居るので一応、この線で論旨を進めてみると福濟寺の当時の住職は十六代目の和僧の海觀通印和尚（文政九年五月七日示寂）で、この寺の檀家は元来、中国の福建省出身者で泉州或は漳

州の人達が多く、従つて寺の別名を泉州寺或は漳州寺といい、一般には「ちゃくちゅう寺」と呼んでいたとい

う。
従つて現段階ではシーボルトがオタクサ（現在のアジサイ）を入手したのは黄檗宗の禅寺である福濟寺にあつた原木に據ることになるが、依然として不明なのは Sinsju の意味で、これを泉州或は禅宗の訛りと解釈すれば一応、結着することになる。固みに現在の福濟寺は戦時中、爆撃を受けて全焼し、古記録は焼失し、目下、再建の途上にあつて、現住職三浦義光師はこの寺を通称、長崎のあじさい寺として復元したい御意向である。（会長）

「長崎の花 あじさい」創刊号は昭和53年（1978年）に発行されました。それから46年もたつと、アジサイに関する常識が変わり、分析方法も進化して新しい事実が発表されています。当然新たな事実が見つかり、これまで信じられていた事も訂正され、生物の学名までも新しい名前が提案される時代になりました。

その一例をあげてみます。アジサイは世界中に栽培が広がった時に、中国原産との間違っただ情報が伝わってしまいました。その理由は、江戸時代に鎖国していた日本にオランダ以外の欧米人が入国できないのでプラントハンターが来なかったからです。そしてもう一つは、フランスやイギリスに渡った最初のアジサイが日本以外の場所から運ばれたことによります。特にイギリスに渡ったアジサイは、当時日本から運ばれたアジサイが中国で増殖され、半野生化している場所もあった時代に、プラントハンターが採集し送ったものです。現在は当協会の働きにより、海外でも「アジサイは日本が原産」が普及しています。ただし、このアジサイはガクアジサイを主とし、エゾアジサイやヤマアジサイを交配育種した花屋さんで見られる園芸種をさします。カシワバアジサイやアナベルは北米産となります。

オタクサが発見された場所は？

平澤 哲

ガクアジサイのテマリ咲きは、現在20株以上発見されています。多くはホンアジサイに似ており、伊豆諸島と神奈川県産より伊豆半島が濃い花色となります。それらの中で私が見た目で判断すると、伊豆半島の極一部にまとまって自生するテマリ咲きの一群が思い当たります。ここのテマリ咲きは、花房全体がヒメアジサイのように柔らかい雰囲気を持っています。オタクサの写真を見ると、このアジサイに似ています。この一帯は野生種であることがわかっているので、この一群の周辺で当時オタクサが自生していたとしても不思議ではありません。



オタクサ似の「磯万度」



ホンアジサイ似の「ヤマト（別名：古代紫）」



オタクサに似た花が多い群落には、このような花房のテマリ咲きが育っています。

アジサイの自生地の野生動物による被害

杉本 誉晃

- 1、伊豆半島のアマギアマチャ及び山アジサイは鹿の食害でほぼ全滅状態です。松崎町で飲料用の甘茶を製造している業者が栽培しているが、わずかな面積です。更に最近は猪の害が多くなり、かなり深刻な状況です。アジサイ国際会議のポストツアーで、天城峠周辺でアマギアマチャを探しましたが、小さな株を1株見つけるのが唯一で、駐車場の脇にあったかなり大きな株は「鹿の食害？」のせいで見る事ができず残念でした。

下田在住の日本アジサイ協会会員の土屋隆一氏が苗を作り、下田観光協会の許可を得て、市立のアジサイ公園に50本植栽し種の保存をしていますが、自生地は山林と里山の放棄で鹿の食料となる草木が生育できず、現状ではアマギアマチャは全滅となる事は明白です。

- 2、房総半島の麻綿原高原のホンアジサイ20万株が鹿の食害で7万株に。

住職日如和尚が昭和26年頃より当地に自生していたアジサイを一人で毎年挿し木して苗を作り、一人でコツコツと植栽し続け、いつしか20万株。和尚は多少鯖を読んだと思うが、その努力に敬意を表し20万株と致し、広大なテマリアジサイ一種の見事なアジサイ園となった。ところが、最初は時々現れる鹿はアジサイを食べなかったが、いつしか鹿の食害で7万株になり、現在は柵を作り保護している。

※このアジサイはこの地にかかなり古くからあったようで、江戸時代後期の本草学者の水谷豊文は「オアジサイ」と呼び、「松前志」の著者である松前広長は「本アジサイ」とし、故山本武臣氏(日本アジサイ協会初代会長)は「ホンアジサイ」が適当であると、以後「ホンアジサイ」とした。

- 3、桐生市黒保根地区(赤城山)のアジサイ生産者の大型ビニールハウス内に鹿が入り、一夜にして鉢植えのアジサイ数千鉢が全滅した。周辺の農家の野菜畑も被害続出。北関東は鹿、熊、更に猪豚による被害が毎年増加している。特に猪豚は植木の生産地で被害が多く、根元を掘り起こして、樹木を倒すので枯死する被害が多くなっている。

※日本全国に野生動物の被害が発生しているので、特にアジサイの被害の大きい所を調査。現在は熊が各地に出没し、死者が出ているので中止。

<アマギアマチャを見たい方へ>

旧天城トンネルにつながる旧道沿いで見ることができます。道沿いの崖から垂れ下がった枝に咲く花も見られますよ。狭い道ですが車で行け、石造りの古いトンネルも通り抜けできます。

この地域(河津町)から西側に甘い葉が多く、東では甘くない葉がほとんどとなります。葉を前歯でかむと甘い株が見つかるかも！ 平澤



シーボルト ー日本植物誌の図版を見るとー

平澤 哲

シーボルトの日本植物誌に掲載されたアジサイの図版を見ると、江戸時代にどんなアジサイが栽培されていたかがわかります。今はテマリ咲きや八重咲きのような大きな変異がないと注目されませんが、江戸時代では装飾花の数や形などの細かな所まで目を向けています。

それでは日本植物誌に掲載されているアジサイの図版を紹介しましょう。

図版 5 1、ガクアジサイ *HYDRANGEA Azisai*

ガクアジサイの花柄が著しく長い花。装飾花 9 個が付く。

日本植物誌にはガクアジサイが 3 図版に 4 種類載っている。其のうち 2 種がガク咲き、2 種がテマリ咲きです。ガク咲きは自生地で普通に見られる花でなく、この図版では花序が長いために装飾花が両性花の上に飛び出ており、他 (55 図版) は 3 輪生葉序のため装飾花を 13 個付けています。テマリ咲きは一つは有名なオタクサ、他の一つ (55 図版の左下) はツェンベルクが記載した日本植物誌に載るアジサイ (ホンアジサイ) と考えられます。このことにより、シーボルトはオタクサとホンアジサイの違いを理解できたことが分かります。

図版 5 2、ガクアジサイ' オタクサ' *HYDRANGEA Otaksa*

ガクアジサイのテマリ咲き「オタクサ」。シーボルトが日本で妻とした女性の名前 (おたきさん) を、このアジサイに付けました。彼は来日の際、ツェンベルクが記載した日本植物誌を持ってきており、オタクサとアジサイを見比べることが出来たと思われます。

図版 5 3、ヤマアジサイ・ベニガク系 *HYDRANGEA japonica*

ヤマアジサイの変種、ベニガクの仲間と考えられるが、紅色が装飾花の中心部にあり周辺部は白に近い。現在栽培されているベニガクは白色から、咲き進むにつれ周辺部に紅が広がります。ベニガクは古くから各地で栽培されたため、その実生から育った中から似た花が発見された可能性があります。今でも、ベニガクに似た装飾花が紅色に変化する花やエゾアジサイに似た葉を持つ個体を見かけることがあります。

図版 5 4、ツルアジサイ *HYDRANGEA petiolaris*

装飾花の白いガク片は幅広く、花序が長い。図版 5 9 のシチダンカの下に描かれたツルアジサイと異なる花形です。

図版 5 5-1、ガクアジサイ・オオアジサイ (Oho-azisai) *HYDRANGEA Belzonii*

一つの節より三枚の葉が出るガクアジサイ。装飾花は 13 個ついている。ガクアジサイの自生地で、全ての茎が 3 輪生葉序になる例は見たことないが、一部の幹・枝がそうなる株は見ています。この場合は、装飾花 12 個が基本となります。

図版 5 5-2、ガクアジサイ・アジサイ (別名: ホンアジサイ?)

上図版の左下にも小さなテマリ咲きのガクアジサイが描かれているが、詳しい説明はない。このテマリ咲きの図を見る限り、当時すでにツェンベルクが命名したアジサイ (ホンアジサイ) であり、その為に簡単な解説で済ませただろう。シーボルトはこのアジサイを植物学者、水谷助六から手に入れている。彼の植物園に植えたオタクサと比べることができ、この二つのテマリ咲きが異なると考えたことは明らかでしょう。

図版 5 6、ヤマアジサイ *HYDRANGEA acuminata*

ヤマアジサイの装飾花が多い変異種です。一つの花房に 10 個の装飾花が付いています。次の図版 5 7 にも装飾花が 9 個と、基準 8 個より多い花房です。現在でも、時々このようなヤマアジサイを自

生地で見ます。

図版 57、ヤマアジサイ *HYDRANGEA acuminata*

2個の花房が描かれており、そのうちの1房は青色の装飾花9個が付いている。ヤマアジサイは、ツンベルクが先に命名していました。

図版 58、アマチャ (Ama-tsja) *HYDRANGEA thunbergii*

ヤマアジサイの変種と考えられています。古くより甘茶は畑で栽培され、葉を採集して加工されています。薄い青色の装飾花はガク片の幅が広く丸弁です。別名はコアマチャ。生葉には甘味が無く、夏から秋に収穫して、その葉を陰干しして発酵させてから、よくもんだ後乾燥します。その工程でフィロズルチンが作られて甘味がでます。

図版 59 - 1、シチダンカ (Sitsidankw' a) *HYDRANGEA stellata*

ヤマアジサイのシチダンカ (七段花)。八重咲きで両性花が少ない品種です。現在の同名の品種は1959年に新たに発見されたもので、江戸時代の七段花とは異なります。

図版 59 - 2、ツルアジサイ (Jabu-demari) *HYDRANGEA cordifolia*

54図と異なり、葉の基部が心形である。色彩が入らず、色は不明。

図版 60、ガクウツギ (Jama-dosin, Kana-utsuki) *HYDRANGEA virens*

葉の付き方などおかしな部分が多いが、この図は慶賀の正確な絵を部分的に継ぎ合わせて作られているといわれる。

図版 61、ノリウツギ *HYDRANGEA paniculata*

一つの節より三枚の葉が出るノリウツギ。装飾花数も1.5倍と多くなります。今でも各地で見られる変異です。

図版 62、コアジサイ *HYDRANGEA hirta*

紫色の両性花だけ集まった花房が描かれています。小さな葉は幅広い卵形で、荒い鋸歯が並んでいる。

図版 63、タマアジサイ *HYDRANGEA involucrata*

紫の両性花と極淡い紫色の装飾花。花房に比べ、大きな葉が目立っています。左下に、小さく丸い蕾が描かれている。

図版 64、タマアジサイ' *HYDRANGEA involuntarily*

装飾花はピンク色の子持ち八重で幅広いガク片をつける。両性花も八重咲きです。花房はガク咲きです。現在も数種類の八重咲が有り、図版の絵は「ヤエガク」や「八重咲きタマアジサイ」に似ています。

図版 65、クサアジサイ (Kusa-Kaku) *CARDIANDRA alternifolia*

属名は *HYDRANGEA* を使用せず、新しい属名 *CARDIANDRA* をつくり発表した。現在は、*Hydrangea alternifolia* に変更されています。

この図のクサアジサイは長崎出島の植物園で栽培されていました、両性花・装飾花共に薄紅色の花房です。

図版 66、クサアジサイ

こちらの図は白花で、図版 65 より大きな葉を付けています。

図版 92、ツルアジサイ (Jabu-demari) *HYDRANGEA bracteata*

淡い紅色の花。葉の基部は心形、葉柄は葉身より短いか同じ長さである

シーボルトの日本植物誌にはツルアジサイが別々の学名で3図版 (図版 54、図版 59 - 2、図版 92) ある。しかし、その後に葉の基部の形や葉柄の長さ葉の形などは幅広い変異があることが分かり、*HYDRANGEA petiolaris* Siebold & Zucc に統一されています。

シーボルトの日本植物誌は図版151点を掲載します。その内17枚がアジサイの仲間で占められています。当時の日本ではアサガオやハナショウブ・セッコク・イワヒバナなどが、それ以前にもツバキ・ボタン・ツツジ・キク・サクラソウなどが流行して沢山の品種がつくられていました。しかし、日本植物誌にはアジサイを除き椿の八重咲と、山茶花の白花・梅の赤花、シロカノコユリなどしか変わった花がありません。この事から彼がいかにあじさいに力を注いでいたかがわかります。日本では江戸時代に流行しなかったアジサイですが、シーボルトは200年後の今を見通していたのでしょうか。

シーボルト日本植物誌は次の2冊を読むと勉強になります。

- ・シーボルト日本植物誌：大場秀章 監修・解説 ちくま学芸文庫
- ・シーボルト「フローラ・ヤポニカ」日本植物誌：木村陽二郎・大場秀章 八坂書房

シーボルト日本植物誌 図版51 HYDRANGEA Azisai



ベニガク系アジサイ —撮影：自生地&城ヶ崎自生アジサイ保存園—

ベニガク系アジサイの写真

No. - h - は、保存園の整理番号です。
平澤 哲

1, 箱根町 白花⇒紅が入る 装飾花はガク片が多く、4～6弁 No. 16h26



2016-7-5 自生地

群生している場所では、もっとヤマアジサイに近い葉と花を持つ交雑種を見ることができます。戻し交雑により、多様なアジサイが生まれているのでしょう。

2, 箱根町 薄い青色又はピンク色⇒紅が入る No. 16h45



2016-7-19 自生地



2018-6-5 保存園



2019-6-12 保存園

3, 箱根町 人為的に植えられたと思われる個体



2017-7-12 自生地近くにある道沿いの花壇

今回はベニガクと一目でわかる花を載せました。これら全てが道沿いで育っていた株なので、人為的に植栽された可能性もあります。

4, 伊豆の国市 白花⇒紅が入る 装飾花は3～4弁 No. 16iz30

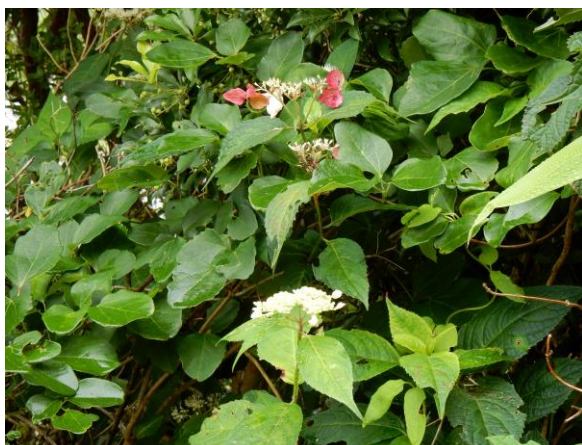


2016-7-5 自生地



2018-6-5 保存園

5, 伊豆の国市 白花⇒紅が入る 装飾花は3～4弁 No. 16iz31



2016-7-5 自生地で撮影

2019-6-19 保存園

6, 湯河原町 薄い青色⇒紅が入る No. 16yg18



2016-7-5 自生地

2018-6-5 保存園



2019-6-12 保存園

2016-7-5 保存園

7, 湯河原町 白花⇒紅が入る 装飾花は3~4弁 No. 16yg19



2016-7-5 自生地

2018-6-5 保存園

群馬県や兵庫県など他の地方でもこのようなベニガクに似たアジサイが見つかっています。古くから伝わる古品種なので、江戸時代にはすでに庭で植栽され、ヒメアジサイやテマリ咲きのガクアジサイのように観賞されていたと考えられます。

北茨城 あじさいの森

杉本 誉晃



深海の色



コナージュ



ラピスラズリ



花模様



水車
百代茶



西
舞



ティアラ



栗島テマリ



吉里の夢



佐橋の荘



濃紫



雲峰の雪

※撮影者は大友直樹、土屋隆一、杉中佳洋。

日本のアジサイがヨーロッパに渡った経緯

平澤 哲

日本原産のいくつかのアジサイが江戸時代後期から明治時代前期にかけてヨーロッパに渡っています。その地ではアルカリ性の土壌が多い為にピンク色の花を咲かせ、バラのように美しいと喜ばれました。その頃の日本では庭に植栽されたアジサイは交配でつくられた園芸種でなく、自生地で偶発的に現れたテマリ咲きなどの変異種が多かったと思われます。ヨーロッパでは、気候に適合・大形の花房・好みの色彩などをめざして19世紀末から20世紀初頭にかけて育種交配が始まります。

それでは、いつごろ、誰が、どのようなアジサイをヨーロッパに送ったのでしょうか！

マレー諸島からモーリシャス島にフランス人天文学者ルジャンテーユがアジサイを持ち込みました。フランス人植物学者フィリベール・コメルソンは、1768年にルイ・アントワーヌ・ド・ブーガンヴィルの世界一周探検航海に同行した。その途中でモーリシャス島に滞在していた時に、コメルソンは植民地監督官そして植物収集家であったピエール・ポワブルに出会い、探検隊からはなれ島に残りました。コメルソンはポワブルの中国産など世界中から集めた珍しい植物を植えた庭園でアジサイを見つけた。1771年ないし1773年にコメルソンはその標本にホルテンシア (*Hortensia*) という名前(属名)だけを付けてフランスに送った。それを受けとった生物学者ラマルクは種名を加えて、1789年に *Hortensia opuloides* と名付けました。しかし、正確な年は分かりませんが、19世紀初頭にこのアジサイは新種でなく、すでに命名されていた日本産のアジサイと同じである事が分かり、属名と種名共に無効となりました。1785年頃に、このアジサイはモーリシャスからフランスへ渡っています。現在でも、英語圏以外のヨーロッパ各地ではアジサイをホルテンシアに近い言葉で表しています。この時にフランスに渡ったアジサイが何であったか分かりませんが、19世紀初頭に文献あるいは生体が存在し、それを見て *Hortensia opuloides* と同一であると確認ができたはずです。その当時存在した文献は、ヨーロッパにガクアジサイを最初に紹介したツェンペリーの日本植物誌(1784年)等であり、ホンアジサイやヤマアジサイが掲載されています。生体としては、ホンアジサイです。

1789年(江戸時代)にホンアジサイ(英名:サー ジョセフ・バンクス)が中国を経てイギリスに渡っています。キュー王立植物園のジョセフ・バンクス卿がプラントハンターを通じて中国からアジサイの生体入手したのです。その2年後にはアメリカにも中国から導入されています。ヨーロッパではピンクに咲き、とても喜ばれました。日本のアジサイが中国に渡った年代は不明です。

1830年にオランダに戻ったシーボルトは、多くの日本産植物・種子を持ち帰りました。その中に「オタクサ」と名付けたテマリ咲きガクアジサイがあります。後に記した日本植物誌にはテマリ咲きの載った図版2点があり、1点は「オタクサ」であり、他の1点はオオアジサイ (*Oho-azisai*) と名付けた3輪生の珍しいガクアジサイの左下に小さく描かれたテマリ咲きです。詳しい説明もないのでツェンベルクがすでに名付けた「ホンアジサイ」とも考えられます。シーボルトは日本にツェンベルクの日本植物誌を持ってきていたので、オタクサとそのテマリ咲きが異なった品種であり、すでに命名されていると考えたのでしょう。

1876年にトーマスホッグ（日本名は不明）と呼ばれている白いテマリ咲きで開花後半に紅色がはいる大輪・多花の品種が、日本からヨーロッパに導入されました。このアジサイは明治時代初期に日本に滞在したアメリカの外交官、トーマスホッグ氏の庭で栽培されていました。

1879年（明治12年）にロゼア（日本名：ヒメアジサイ）がイギリスの植物学者で、英国の種苗会社・ウィーチ商会が極東へ派遣したプラントハンターでもあったチャールズ・マリーズによって本国に渡っています。イギリスでは赤色に咲くことからロゼアと名付けられました。イギリスではピンクのテマリ咲き、その濃く澄んだ色が好まれました。

1879年にマリエシイ（日本名：モモイロアジサイ）もロゼア同様チャールズ・マリーズによってヨーロッパに導入されました。装飾花の多い半テマリ咲きのガクアジサイ。花色はピンクに咲きやすく、強い酸性土でないと青くならないと言われています。多彩な品種群を作出する交配親として利用されました。

日本 ⇒ 品種・年代不明、中国⇒ マレー諸島 ⇒ 1771年・モーリシャス⇒ 1785年・フランス

日本（ホンアジサイ、英名サー ジョセフ・バンクス）⇒ 中国⇒ 1789年・イギリス

日本（Otaksa、日本名もオタクサ、テマリ咲き）⇒ 1830年・オランダ

日本（トーマスホッグ、白のテマリ咲き、日本名は不明）⇒ 1876年・ヨーロッパ

日本（ヒメアジサイ、英名ロゼア）⇒ 1879年（明治12年）・イギリス

日本（マリエシイ、日本名は桃色あじさい）⇒ 1879年・イギリス

以上がアジサイがヨーロッパに渡った経緯です。

関連人物の紹介

○ フィリベール・コメルソンは、1768年にルイ・アントワヌ・ド・ブーガンヴィルの世界一周探検航海に植物学者として同行しました。寄港地では植物の調査と採集を行い、約60の属と約3000もの種を発見しています。その後も東南アジア諸国やマダガスカル島などで調査・研究を行っています。

○ サー ジョセフ・バンクスは準男爵であり、博物学者・植物学者・プラントハンターとして園芸界・植物界に多大な貢献をしています。ジェームズ・クックによる南太平洋探検の第一回航海に参加して、ブラジルからニュージーランド、オーストラリアに渡っています。キューガーデンの顧問に就任すると、世界に植物学者やプラントハンターを派遣してキューガーデンを世界でも傑出した植物園に育て上げました。ホンアジサイもこの動きの中で中国からイギリスへ送られていました

○ シーボルトは1796年に神聖ローマ帝国ヴェルツブルク（現ドイツ）に生まれました。1805年にハイディングフェルトに移住しています。大学で医学をはじめ動物学・植物学・民俗学などを学び、卒業後に医師として近くの町で働きました。しかし、海外の自然に興味を持ち、世界中で貿易をしていたオランダでオランダ領東インド陸軍病院の外科少佐となっています。1822年にロッテルダムから出航しジャカルタを経て長崎の出島に到着し、オランダ商館医となります。出島では医師として働き、島の外では鳴滝塾を開き、日本の医師や学者に西洋医学などの講義を行っています。また、島内に植物園をつくり、1400種以上の植物を栽培していました。アジサイ「オタクサ」もそこに植えられていました。シーボルトが来日にさいして政府に命じられたのは医師としての仕事だけでなく、動植物や地理・民俗・気候など幅広く調査することでした。

1828年、シーボルト事件により国外追放処分となり、1830年にオランダに戻りました。シーボルトは日本よ

リオランダに民俗資料と文化資料を 5000 点以上、動物の標本 7000 点以上、植物の標本約 12000 点、植物を約 2000 種持ち帰っています。

○ ツェンペリー（ツンベルク）はシーボルトより 48 年前の 1775 年、長崎の出島にオランダ商館付き医師として赴任。1776 年には帰国のために日本を去りました。仕事は医師としてだけでなく、ヨーロッパで利用できる植物を調査する事も大きかった。彼は 812 種の植物標本を持ち帰っています。若いころに医学と植物学をリンネより学びました。ツェンペリーはアジサイを紹介した日本植物誌（1784 年、ラテン語、スウェーデン語）を書いています。その本にはガクアジサイ（ホンアジサイ）とヤマアジサイが学名入りで載っています。

○ チャールズ・マリーズ（Charles Maries）はイギリスの植物学者。イギリスの巨大な種苗会社、ヴィーチ商会と契約し極東へ派遣されました。1877 年（明治 10 年）と 1879 年に、日本・台湾・中国において調査・植物採集を行い、約 500 種の新種をイギリスに送っています。園芸界に多大な功績を残した著名なプラントハンターの一人です。

ヤマアジサイ ミニ写真集



藤娘



一閃（いっせん）



赤兵衛



天の川

2023日本の自生アジサイ展（鎌倉アジサイ同好会主催）を見学して

平澤 哲

2023年5月23日～28日に大船フラワーセンター（神奈川県）で開催された「2023日本の自生アジサイ展」を見学に訪れました。鎌倉アジサイ同好会の皆様が、精魂込め育てられたヤマアジサイが所狭しと並べられていました。ピンクから濃紺、手毬咲き、八重咲、斑入り葉などあらゆる変化を持つヤマアジサイに、誰が見ても感激したことでしょう。また、コガクウツギとの交雑種など、これからの育種に期待される品種も見られ、有意義な時間を過ごすことができました。期間中に、「アジサイの育て方講習会」行われており、格安で苗を販売しています。会場は写真を撮るのも迷惑になるほど見学者が多く、ゆっくりと見入っている姿が目立ちました。最終日ということもあり、たくさんの会員の方々がお手伝いに来ていました。その中で入会したばかりの二名の若い女性を紹介され、話すことができました。その時に、鎌倉アジサイ同好会は若い人が集まるほどの活気があると感じました。日本アジサイ協会は全国対象の組織なので同様のイベントは開催できませんが、会員の皆様が今より身近に感じ、何か得る事があり、交流できる組織になり、若い人が入会する組織にならないと帰りの電車の中で反省しました。



九重（くじゅう）の花吹雪



土佐のまほろば



紅紫光（べにしこう）



白鳥



黄金の夢



藤娘



天の川



丸山牡丹



鉢植えによる展示です



貴婦人

これほど多品種のヤマアジサイを見られる機会はありません。鉢植えでテーブルにのっているの
で、一鉢一鉢を目の前で見ることができます。

[ここに入力]

アジサイ発生の起源

杉本 誉晃

日本のアジサイの発生は大変古く、新生代新第三紀中新世の地層白沢層からアジサイの化石が採取されています。

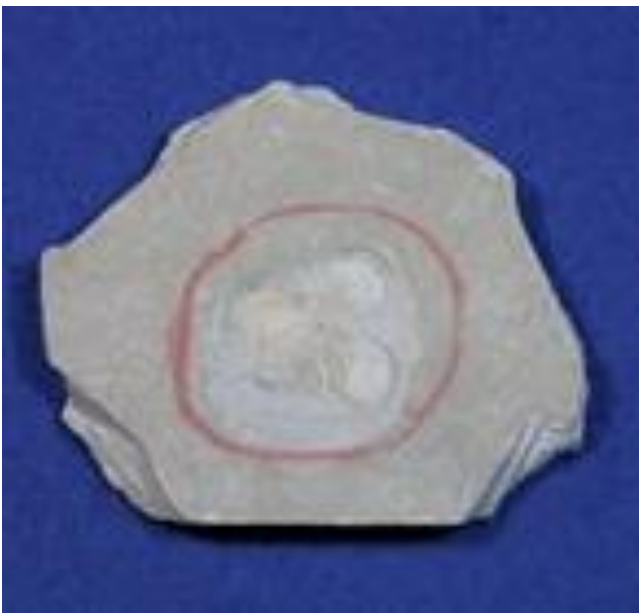
中新世(ちゅうしんせい、Miocene)は地質時代の一つであり、約2,300万年前から約500万年前までの期間で、その頃日本画ユーラシア大陸から分離し、日本海が形成された。

その頃の気候は一般的に温暖であったが、中新世の終わり頃には寒冷化が徐々に進行し、氷河期が訪れる。アジサイが如何にして氷河期を生き残ったのか知る術もないが、この頃海と陸の生物相はより現代に近づいた。狼類、猫科類、馬類、ビーバー類、シカ類、ラクダ類、カラス類、鴨類、フクロウ類、メガドロン類等は中新世に存在していた。ヒト科もこの時代に現れた。

植物ではC4型光合成を行うものが増加した。トウモロコシや雑穀類がC4植物である。

※この文献はウィキペディア(Wikipedia)の中新世を参考にしました。

アジサイの化石



和名：センダイアジサイ

学名：Hydrangea sendaiensis(斜体)Okutsu

産地：宮城県仙台市太白区秋保町西沢(現在はこの地名はありません)

地層：白沢層(700万年前頃)

提供：スリーエム仙台市科学館

住所 〒981-0903 仙台市青葉区台原森林公園4-1

TEL 022-276-2201 FAX 022-276-2204

WEB：<http://www.kagakukan.sendai-c.ed.jp/>

※科学館では現在、実物標本ではなくレプリカを展示(実物標本は東北大が収蔵)しています。

神奈川県におけるヤマアジサイとガクアジサイの交雑種及びその周辺のアジサイ

平澤 哲

神奈川県は関東地方の南部に位置し、南西に静岡県、西に山梨県、北から東にかけて東京都と接しており、南は海となります。ヤマアジサイは一部を除き人里から入った林や川沿いに自生し、東日本型の白花が基本です。ガクアジサイは岩場のある海岸に自生し、東部では薄い青色に咲き、伊豆半島に近い西部の方は少し濃い色になります。さらに、海岸から離れた内陸部にヤマアジサイとガクアジサイとの交雑種が自生し、白から薄い青色までの花を咲かせます。

ヤマアジサイは里山周辺から道沿い、林の中で見られます。葉の幅はアマギアマチャからヤマアジサイまで、大きさは小さな（仮称）イワガクからホソバコガク、ヤマアジサイ、ガクアジサイ並に大きな葉のヤマアジサイ（狭い地域に自生）まで変化があります。ヤマアジサイの変種とされるベニガク（エゾアジサイ×ヤマアジサイ）の実生株も数ヶ所で見ることができます。三浦半島周辺のヤマアジサイは自生地が少なく、その中で際立っているアジサイはガクアジサイ並みに大きくなるヤマアジサイです。大きな株は葉の大きさ、樹高共にガクアジサイに近く、白い花を咲かせます。このアジサイはそれなりに花房が大きく、遠くから見るとヤマアジサイに見えないので白花のガクアジサイかなと間違えてしまいます。箱根周辺で見られるヤマアジサイの仲間は小型のイワガク、細葉のホソバコガク、そしてヤマアジサイがあります。ただし、葉の幅はホソバコガクとヤマアジサイとの間がつながっており、私にとってはどこで区別するのかわかりません。ここでは三浦半島と異なり、道路沿い、登山道、林内、住宅地まで数多くの自生地を見ることができます。

ガクアジサイは主に海岸沿いで見られます。また、少し離れた田畑の道沿いでも見ることがあり、開墾によりできた陽があたる道沿いに新しく進出したのでしょう。三浦半島では海岸より3km以上離れた川の岸壁に自生していた例があります。小田原市以西のガクアジサイは花色が伊豆半島産に近く、青紫色も混ざっていますが、三浦半島の海岸沿いでは装飾花が薄い色となります。稀に畑に沿った道や町中の川沿い、林沿いで色の濃いガク咲きのアジサイを見ることがあっても、葉や装飾花の形と数などから園芸種の関わった可能性が強いです。神奈川県内3ヶ所でテマリ咲き7株を見ており、すべてゴロタ石が並ぶ海岸の岸壁の途中、高さ3～6mの場所でした。その他に、トイ咲き・白花なども見ることができます。

伊豆半島城ヶ崎海岸のテマリ咲きは野生の株であることがわかっています。しかし神奈川県では都市化が進み、海岸の近くまで住宅地ができています。そして、近くの庭には花屋さんから購入したアジサイがいたる所に植えてあるので、特にテマリ咲きの場合は園芸種が関わった個体があることも考えられます。

ガクアジサイとヤマアジサイの2種が関わった交雑種は、箱根町周辺と三浦半島に自生します。三浦半島では以前に千葉県の博物館の方が青い装飾花の交雑種にミウラアジサイと名付けましたが、後で撤回したとききました。交雑種は半島全体に分布することはなく、北部に小さな群落が点在すると思います。交雑種とヤマアジサイが同じ群落内で見られ、これまで交雑種では両性花が青、装飾花が白の花を見ているだけで、まだ全体が青色の花は見たことがありません。今後の調査に期待しています。

箱根周辺では道沿いで数多くの交雑種が花を咲かせます。ヤマアジサイと混生することが多く、青花も見られます。中にはキヨスミサワアジサイが関わったと思わせる赤紫色の新葉と白花の周囲にピンク

が入る花を持つ株、日陰で咲くと白から薄い緑に変わる株等幅広い変化があります。樹高はヤマアジサイから小型のガクアジサイぐらいでしょうか。ガクアジサイとヤマアジサイの自然交雑種に関し、フランスのアジサイ研究家コリン・マレーさんは「*Hydrangea × serratophylla*」を学名として提案しています。

この地域内にベニガク系のアジサイがあります。葉がベニガクに似て開花後半になると装飾花に紅が入る株や、葉は他の交雑種と同じだが花が白から紅に変わるもの、葉や花の形が同じで、花の色だけ青から後半に紅が入るものと変化は様々です。さらに戻し交雑で生まれたと思われるヤマアジサイにそっくりな株に薄いピンクに変わる花のアジサイも同じ群落内で見られます。一ヶ所の群落では100m離れた道沿いにベニガクが植えてありました。

伊豆半島にもヤマアジサイ（主にアマギアマチャ）とガクアジサイの自然交雑種が広い範囲で分布しています。静岡県伊東市から箱根町に行くときに山側の道路を通ると、点々と交雑種とヤマアジサイがあり、箱根近くではその数が増えてきます。伊豆ではガクアジサイが自生しているので交雑が考えられますが、近くにガクアジサイが自生しない箱根ではどのように交雑が起こったのでしょうか。ベニガク系のアジサイがある例から、庭に植栽されていた個体が関わった可能性があるため、遺伝解析で確かめることが必要でしょう。

ミニ情報 西日本型のヤマアジサイについて

平澤 哲

西日本型のヤマアジサイの中で、ナンゴクヤマアジサイ（鹿児島県と宮崎県南部及び西北部）とヒュウガアジサイ（宮崎県）は変種として独立しました。また、最近になりヤマアジサイの分類を変更する動きがあります。確かに花色を考えると、ある地域を境に西側は青色、東側は白色とはっきり二つに分かれています。もし西日本型を変種として区別する場合は、和名がニシノヤマアジサイとなり、学名が「*H. Sersirata* var. *acuminata*」となるでしょう。また、四国・九州と本州のヤマアジサイを分ける考えもあります。その場合は、前者をサワアジサイと呼ぶことになります。これ以外にもヤマアジサイには、福井県以西のエゾアジサイはヤマアジサイの変異型との考え方があります。

最近知ったのですが、神奈川県には葉や花（白色）の大きさや樹高がガクアジサイ近くに育つヤマアジサイが自生しています。また、同県には一部地域にヤマアジサイより全体が少し小型の（仮称）イワガクもあります。まだまだ、謎の多いアジサイですね。



九重凜華



伊予冠雪

● 当会の目的に「情報並びに品種の交換と親善」及び「種苗の交換及び斡旋」があります。また、会報32号に「会員間での種苗交換を進めることを検討する」ともあります。これまでの活動で会員の皆様と、交流と親睦の場を持つことが難しかったので、会報を活用したいと思います。会員の皆様の交流の場ですので、多くの投稿をお願いいたします。

あじさい交流広場

アジサイに関する、質問・挿し穂や苗の交換・自慢のアジサイ紹介・新発見情報・お気に入りのあなたの写真などを担当者にお送りください。

担当：平澤哲（413-0232 静岡県伊東市八幡野 1156-2、メール：izujojasaki@gmail.com）

★この号では、皆様の投稿が間に合いませんので、役員の投稿のみとなります。次回から会員の投稿や写真をたくさん載せたいと考えていますので、この広場にたくさんの投稿をお寄せ下さい。今後は、少しでも会員主体の会報となるように努力いたします。

品種の交換、求む、譲る

【求む 静岡県平澤哲】

採集地がわかるヤマアジサイとエゾアジサイの交雑種を探しています。挿し木用の枝でも可能。私の手持ちのアジサイとの交換もできます。

【千葉県産の自生ガクアジサイの挿し穂を希望 静岡県平澤哲】

採集地が分かる各地のガクアジサイを集めています。伊豆から三浦半島までは採集しましたが、千葉県はまだ調査に行けておりません。お送りいただいた枝は、挿し木をして苗をつくり、保存用の公園で保護することになっています。

【教えてください 静岡県平澤哲】

三浦半島でヤマアジサイとガクアジサイの交雑種がどこに自生しているか調べています。ご存じの方はご連絡ください。

【テマリ咲きのガクアジサイを差し上げます 静岡県平澤哲】

ただし、個人の庭用でなく、公園やお寺等に植える目的の方に差し上げます。これらのテマリ咲きは伊豆半島と紙奈川県の自生地で見つけたガクアジサイで、10種類以上あります。苗は一品種につき一鉢、挿し穂（地植えの株のみ）は数枝。

【散り斑いりガクアジサイ「白雨」の苗を差し上げます。静岡県平澤哲】

城ヶ崎自生アジサイ保存園に来られる会員の方に差し上げます。来られる方は事前にご連絡ください。

次の号より、会員の皆様の投稿でこのコーナーを作りたいと考えています。交流の場として、自由にご利用ください。フォトギャラリーではお気に入りの写真をはじめ、新品種や珍しい品種の紹介、自生地の写真、旅行先で撮った写真、アジサイ展の紹介などを載せる予定です。メールでの投稿も可能です。

アジサイのフォトギャラリー

【ウラキソヤエデマリ タマアジサイ】 愛知県前田悟

- 岐阜県東濃の付知町伊藤氏が付知町で発見
- 名古屋市の井波一雄氏が命名
- 特徴：小型の飾り花が多くつく。白色の細弁で八重咲となる



【ガクアジサイの斑入り（白雨）】 静岡県平澤哲

数年前に大きな株のガクアジサイの中に斑入り葉を付けた枝を見つけました。これまで挿し木で増やすと共に斑がよくでた枝だけ残し、緑の強い葉の枝を取り除くことで、満足できる斑入りガクアジサイができました。おまけに、装飾花は絞り咲きです。今では挿し木を繰り返したので数十株に増えています。



【ガクアジサイの八重咲（磯笛）】

静岡県平澤哲

伊豆半島産の八重咲き4種類の中で一番濃い色を持ち、立体的な装飾花です。装飾花の形は最後までくずれません。交配親に使用すると良いかも。樹勢が強く樹高が高くなります。

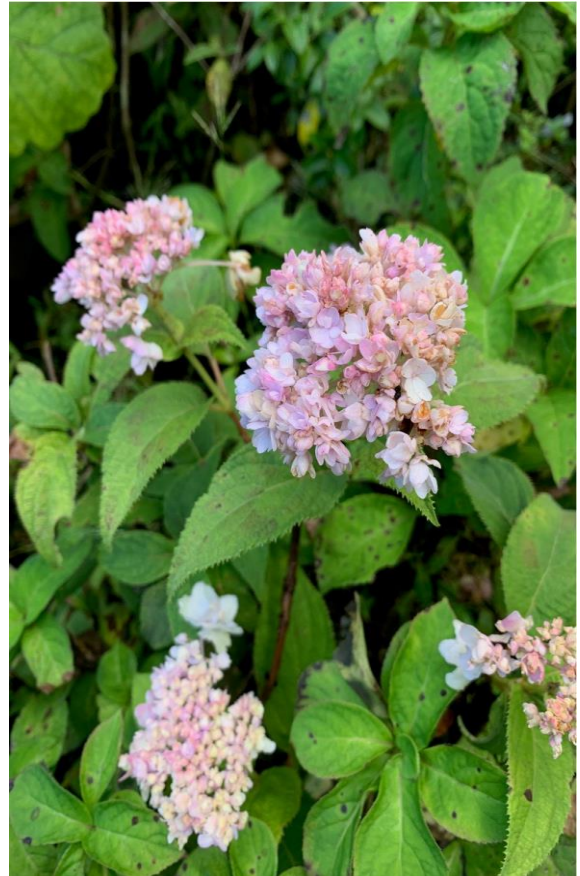


【写真3点】

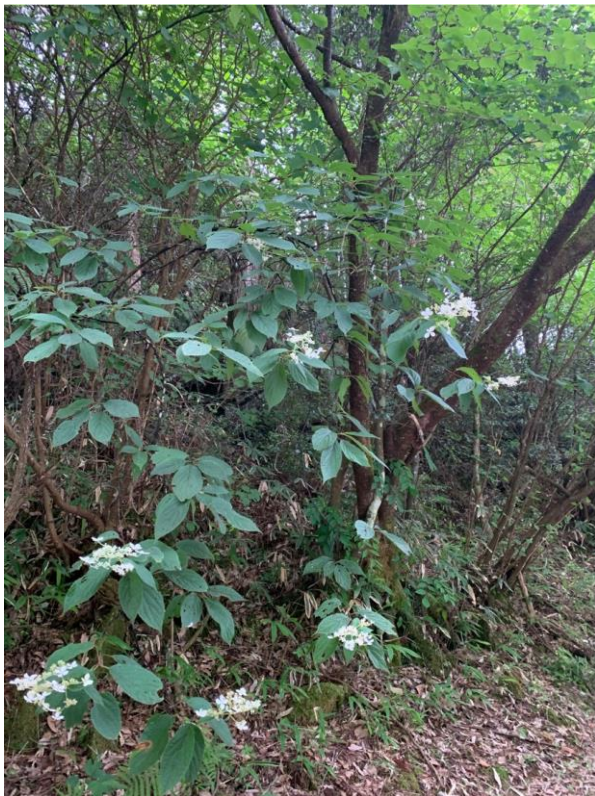
愛知県前田悟



コアジサイの鉢仕立て



矢作（やはぎ）ギョクダンカ



木曽谷に咲く

自生地の写真

交雑種 伊豆半島



令和5年度総会

日時 令和5年6月12日 午後13時半
場所 伊豆下田 下田市観光協会会議室
参加者 11名（下田市観光協会より2名）後日1名加わる
内訳 会長（前田悟）副会長（平澤哲・武井帝）監査（鈴木美智子）会計（座間由紀子）
会員（6名）

総会は副会長武井帝より開会宣言
を行い、会長前田悟の挨拶に始まり、議長は下田観光協会事務局長藤原氏にお願いし始める。

以下

開会挨拶	会長	前田悟
事業報告	副会長	武井帝
事業計画	副会長	武井帝
会計報告	会計担当	座間由紀子
会計監査	会計監査	鈴木美智子
予算案	事務局	座間由紀子
組織票説明	事務局	武井帝
質疑応答		

今回出席した会員は相互に連絡を取り協会の組織に必要な事柄について協力することで賛同を得た。

関西地区の情報が少ないので、今回参加の野村氏に中心になっていただくことで了解を得る。

閉会挨拶 副会長 平澤哲

本総会において5年度事業計画及び予算について賛成多数で承認されました。

閉会后下田公園のアジサイ見学を下田市観光協会藤原氏ほかに案内していただき、素晴らしいあじさいの園を見学しました。

翌日は地元会員の土屋氏に下田の自生のあじさいを案内していただきました。

又午後は、副会長平澤氏のアジサイコレクションを拝見させていただき、大変勉強になりました。

又総会の会場では大阪糖菓社長の野村氏よりお菓子の差し入れがありました。ありがとうございました。

和やかな雰囲気の中本総会が開催できたことを感謝しています。

（副会長武井）

令和5年度事業報告及び事業計画

令和4年度事業報告：コロナによる活動中止のため特別報告することはありません。

令和5年度事業計画

1. 本会議により議論し決定いたします。
2. 会報33号の出版。
3. ホームページの新たな立ち上げ。
4. 広報活動の充実。
5. 会報その他によるスポンサー料の獲得。



おしらせ

★会員を募集しています

会員の皆様にお願ひです。アジサイ好きの友達に、アジサイに興味を持ち始めた方に当会への入会をお勧めください。

★会報の原稿を募集します。

自生地情報・旅行先で見たアジサイの写真集・新発見情報・地方で活躍するアジサイ同好会など、新鮮な原稿をお送りください。なお、原稿は原則として Windows OS で再生可能なソフト（ワードなどの文章作成ソフト）により作成されたものを基本とします。手書き原稿での投稿についてはご相談ください。

★アジサイ協会の有志で、仮称（あなたの知らないアジサイの世界）アジサイに関わるいろいろな事柄を掲載する出版物を出版会社に依頼され、制作しています。出版時期は未定です。どうぞご期待ください。

★ホームページの立上げ

前田会長のご尽力により、新たにホームページを5月中に立ち上げます。『日本アジサイ協会』又は『nphyrangea.com』で検索してください。

★コロナ禍で会の活動が十分に行われませんでした。今年も昨年同様に総会を開催する予定ですので、大勢の参加をお待ちしております。ここ数年は関東周辺で開催してまいりましたので、今年では中部地方で総会を開催し、翌日はヤマアジサイの自生地を見学したいと思います。今後は関西地方で開催することも考えられます。

★会費納入のお願い

2024年度分（2024年4月1日～2025年3月31日）の年会費（3000円）の納入をお願いいたします。本会報と一緒にお届けする振込用紙をご利用ください。不明な点は、郵便にて下記の事務局に連絡をお願いいたします。

日本アジサイ協会組織表 令和5年4月1日現在

役員	会務担当				
最高顧問	池田正弘	事務局長	杉本誉晃	会計監査	鈴木美智子
名誉会長	杉本誉晃	事務局	武井帝	広報及びホームページ	前田悟
会長	前田悟	同上	座間由紀子	同上	島田明子
副会長	平澤哲	会計長	武井帝	技術部門及び会報	平澤哲
副会長	武井帝	会計	座間由紀子	同上	市原るみ子

あじさい 2024年5月8日発行 第33号（非売品）

発行人 前田 悟 / 発行所 日本アジサイ協会

事務局 〒173-0037 東京都板橋区小茂根5-3-11 杉本
誉晃方

振込先 ゆうちょ銀行